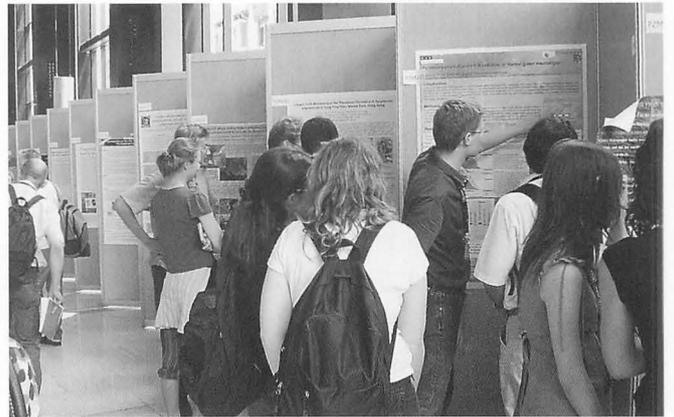


植木知佳：第4回ヨーロッパ藻類学会国際大会参加記

2007年7月23～27日の5日間、ヨーロッパ藻類学会の第4回国際大会がスペインのオビエドで開催されました。オビエドまではスペインの主要都市から国内線に乗り継ぎ、スペイン北部のアストゥリアス空港まで空路での旅でした。オビエド市街地は世界遺産に登録されている大聖堂を中心に公園や教会が配置されており、多くのカフェとバルが終日賑わっていました。私はヨーロッパを訪れるのが初めてで、かつガイドブックにはあまり掲載されていない田舎町での約1週間は非常に楽しみでした。会場はオビエド市街の中心に位置したホールでした。開会式はアストゥリアス地方の民族楽器であるバグパイプの演奏で始まり、地元テレビ局の取材もあり、町全体をあげての歓迎でした。ヨーロッパ、アメリカ諸国から約300人の藻類研究者が集い、日本からは十数名が参加しました。藻類学会ではお会いできない方や会ったことはあるけれども話す機会に恵まれなかった方々とも一緒に、新しい縁も深めることができました。

朝はキーノートから始まり、その後各セッションに分かれてのシンポジウム(“Genomics and Cellular Biology”, “Evolution of Algae”, “Global Change from Lakes to Oceans”, “Ecological Interactions and Ecophysiology”, “Biogeography, Biodiversity and Conservation”, “Applied Phycology”), そしてポスターセッションの後、口頭発表という流れでプログラムが組まれていました。ポスターは194題、シンポジウム・口頭発表では133題の研究発表がなされました。毎朝のキーノートでは初日が“Astrophycology”の提唱者である地元スペインの研究者による発表から始まり、2日目は植物プランクトンの系統進化、生体生理学、そして海流モデル、地質から分かる地球環境の変化に関する講演でした。3日目は葉緑体の構造、遺伝子情報から分かる植物門全体の進化に関する研究の現況を報告するものでした。そして4日目は微細藻類の大量培養とそれらの産業への応用に関する講演でした。以上のように多岐にわたった分野の最先端について知ることができ、早起きも無駄にならず、朝から刺激的でした。



ポスターセッション風景

シンポジウム・口頭発表は6セッションごとに分かれて進められました。特に興味深かったのは“Genomics and Cellular Biology”で、演題数は少ないながらもどれも勉強になり、自分の研究の位置を確認することができました。また、私もスサビノリの核分裂について口頭発表をさせていただきましたが、初めての国際学会での口頭発表でしたので、ただただ緊張し質疑応答ではあわや石になるところでした。次回、参加するときまでには英語をしっかりと勉強し、他の演者のように堂々と質問者とディスカッションできるようになりたいと思いました。

また、本学会での大きなニュースとして特筆すべきは、ポスターセッション時に多くの人が集まり特に盛況であったお二人、東京大学・新領域創成科学研究科の吉田大和さん(D2)、茂木祐子さん(D1)がポスター賞を受賞されたことです。アジアからの参加者が少ない中でポスター賞を独占したということは大変喜ばしいことでした。次回、2011年の第5回大会はギリシャで開催されることが閉会式で発表されました。次回も参加できるようにと気持ちを締めつつ、スペインでの思い出を胸に帰途に着きました。

(北大・院・水産)



4th European Phycological Congress

参加者の集合写真

Oviedo, 23-27 July 2007

(EPC-4 大会委員長の快諾を得て掲載)